

令和七年度 学士入学・一般編入学試験問題

文学部 日本文学科

専門科目

― 注意事項 ―

- 1 問題は2ページ、解答用紙は1枚である。
- 2 解答はすべて別紙解答用紙に縦書きで記入すること。
- 3 試験時間は60分である。

11月10日(日)

T11A・Y11A

このページには問題はありません。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

あまの河あさせしら波たどりつつわたりはてねばあけぞしにける

この歌の心は、あまの河の深さに、あさせしら波たどりて河の岸に立てるほどに明けぬれば、「今はいかがはせむ」と、逢^あはでかへりぬるなり。
⁽¹⁾ さることやはあるべき。ただの人すら、ひととせを夜昼恋ひくらしめて、たまたま女逢ふべき夜なれば、いかにしてもかまへて渡るらむものを。

まして、たなばたと申す星宿にはおはせずや。あまの河深しとて、かへり給ふべきにあらず。いかにいはむや。その河にはかささぎありて、「紅葉をはしに渡し」ともいひ、「渡し守舟はや渡せ」ともいひ、「君渡りなば楫^{かぢ}かくしてよ」とも詠めり。かたがたに渡らむことは、さまたげあらず。
⁽²⁾ 渡し守の人を渡すは、知る知らぬはあるべき。七夕の心ざしありて渡らむとあらむに、渡し守などてかいなび申さむ。また、河もさまでやは深からむ。かたがたに心^(a) 得られぬことなり。また、^(b) ひがことを詠みたらむ歌を、古今に、躬恒・貫之、^(c) まさに入れむやは。たとひ、かの人々こそあやまちて入れめ、^(d) 延喜の聖主のぞかせ給はざらむやは。もし古今の書きあやまりかと思ひてあまたの本をみれば、みな「⁽³⁾ わたりはてねば」とあり。おろさかしき人の、書きたる本にやあらむ、「⁽⁴⁾ わたりはつれば」と書ける本もあり。^(e) おぼつかなきに、人に尋ね申しは、なほ「⁽⁵⁾ わたりはてねば」とあるべきなめり。「わたりはつれば」とあるは、あしきなめり。

かやうのことは、⁽⁵⁾ 古き歌のひとつの姿なり。恋ひかなしみて立ちあ待ちつることは、ひととせなり。たまたま待ちつけて逢へることは、ただ一夜なり。その程のまことに少なければ、まことには逢ひたれど、^(f) なかなかにて逢はぬかのやうにおぼゆるなり。されば、程のすくなきに、逢はぬ心地こそすれと詠むべけれど、歌のならひにてさも詠み、また逢ひたれど、ひとへにまだ逢はぬさまに詠めるなり。たとえば、月の山のはに^い出でて山のはに入ると詠むがごとし。いつかは、月、山より出でて山には入る。されどもうち見るがさ見ゆるをさこそおぼゆれとは言はで、ひとへに山より出づるやうに詠むなり。これのみかは。花をしら雲に似せ、紅葉を錦に似せなどするも、ひとへに、それにこそはなすめれ。ことたがふもの、人のものいふは、似たるものをもひとへになし、聞かぬ事をも聞きたるやうにこそは言ふめれ。それがやうに、歌も逢ひながら逢はずとは言ふなりとこそうけたまはりしか。

(『俊頼髓脳』)

(注) ○あまの河あさせしら波―『古今和歌集』紀友則の歌。

○紅葉をはしに渡し―「天の河紅葉を橋にわたせばや七夕つめの秋をしも待つ」(『古今和歌集』)

○渡し守舟はや渡せ―「渡し守舟はや渡せ」とせに二たびきます君ならなくに」(『古今和歌六帖』)

○君渡りなば楫かくしてよ―「久方の天の河原の渡し守君渡りなば楫かくしてよ」(『古今和歌集』)
○おろさかしき―なまかじりにものに通じているさま。

問一 「あまの河」歌における掛詞を説明しなさい。

問二 傍線部(a)を品詞分解し、各語について文法的な説明をしなさい。

【例】 明け(動詞・力行下二段・連用形) ぬれ(助動詞・完了・已然形) ば(接続助詞)

問三 傍線部(b)・(c)・(e)・(f)を現代語訳しなさい。

問四 傍線部(d)が誰かを漢字で記し、文中に登場する理由を説明しなさい。

問五 波線部(1)の内容について、具体的に説明しなさい。

問六 波線部(2)を現代語訳しなさい。

問七 波線部(3)「わたりはてねば」と(4)「わたりはつれば」との意味の違いを述べなさい。

問八 波線部(5)の内容について、文中に掲出されている例を用いながら、具体的に説明しなさい。

問九 本文の筆者は、「あまの河」歌の一般的解釈のどのようなことを問題とし、どのように解釈し直したかを説明しなさい。